

栗の話

竹島茂郎

外よりは手もつけられぬ要害を

内より破る栗のいがかな。(古歌)

空晴れて氣清き秋の日和には、一日を山に暮らすもまた興あるへし。子供等は栗の實を見付けたる時は、我先きにと小枝を折りとりて、まだ開きもせぬいたくしき要害を、手に血をにじませながらもうち破りて、中の實をもぎ取るは興あることに相違なきも、黄ばみたるいがの大きく開きて、海老茶色の美しき實が、吹けば落ちん風情あるを、ゆすり落して、草の間落葉の下などに貌をかくせるを、拾ひ集むるは更に興あるべく。裏の山に大きな栗の木ありて、朝な夕な其の下に落ち散れる實を我先に拾はんものと、宵の中よりあすの朝は母と共に起き出で、拾はん程に、是非起してよと約束して、薄暗きあしたのそらに眼をこすりこ

すり足もと覺束なく、大木のもとに驅け出すなどは何と興あることにはあらずや。桃栗三年と云つて、栗などは甚だ生育早き植物にして、實生のものが三年にして既に實を結ぶものなれば、幼稚園等にも之を植ゑて登園を樂ましむるも一工夫ならん。栗の葉は霜と共に落ち散りて、蔭深かりし森も初冬の光斜にさし込みて、乾き切れる栗の葉が小さき子供の足に高き響を起さしむるも面白し。栗に「おほぐり、ちうぐり、しばぐり」の三通りあり、「しばぐり」は又「かちぐり」と呼び、甚だ縁起よき名にして、凱旋の式には缺くべからざる品なり、「かちぐり」の實は小粒にして、澁皮を取る事甚だ面倒なるも、味最もこまやかにして、上品なり、「おほぐり」は又丹波ぐり、料理ぐりなど呼びて、極めて美事なる「くり」なり。栗の材は濕氣に遇ふも容易に腐らざるがゆゑ、鐵道の枕木として甚だ大切なる品なり、又栗の炭は堅くして火力強きがゆゑ、鍛冶屋等の使用に適

し、樹の皮よりは單寧と云ふ薬品を取りて染料及び鞣皮用となす事を得べし。効用多き植物なり。

「くり」に近きものに「しひ、かし、くぬぎ、なすら」

等あり、何れも雌雄異花にして、雄花は細長き穂の形をなし多敷集合して人の眼をひけども、雌花は小さくして苞にてつゝまるゝがゆる注意せら

るゝこと少し、子房が熟して果實となる頃には、苞は大きくなりて此の果實を包む、之を殻斗と呼び、此の類の植物をまとめて殻斗科となす。「か

し」の實は小さくして殻斗は茶碗形をなし、「なら」の實は「かし」の實を長く大きくしたるが如く、「くぬぎ」の實は所謂「どんぐり」として殆んど球形の直徑三分位の大きさあり、「しひ」の殻斗は囊状にして

「くり」のは所謂「いが」なり。

殻斗科植物は凡て木本にして、材は薪炭用に宜しく、「しひ、なら、かし」等の材は又椎茸を作るに適す、瓶の栓に用ふる「コルク」(木栓)は「こるくがし」と呼ばるゝ種類の樹皮にして、スペインに

産す、但し我國四國九州及び臺灣に産する「あへまきぎ」(こるくぬぎ)も其の樹皮は「コルク」となすに適す。我國は明治四十年に於て凡五十萬圓、四十一年に於て凡三十九萬圓、四十二年に於て凡二十三萬圓のコルクを海外より輸入したり。

○子供の権利

「子供の権利」といふのは兒童研究に熱心な田村直臣氏が近著の表題である。一寸聞くと多少荒立つたやかましい書名であるが、要するに子供の爲を切に思ふ熱心がら、子供の友として社會に教へんとする主張に他ならぬ。二十九の問題に分けているの方面から子供の爲に斯うして賞ひ度いと思ふ著者の注文と其の理由とが書いてある。文章も平易な極く通俗の小冊子であるが、一般家庭に奨めて極めて有益な書である。

(定價五拾錢、京橋區尾張町警醒社發行)